

## 黙示録 19 : 7-21

「イエス・キリスト：王の王、主の主」

19:7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。19:8 花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」19:9 御使いは私に「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい」と言い、また、「これは神の真実のことばです」と言った。19:10 そこで、私は彼を拝もうとして、その足もとにひれ伏した。すると、彼は私に言った。「いけません。私は、あなたや、イエスのあかしを堅く保っているあなたの兄弟たちと同じしもべです。神を拝みなさい。イエスのあかしは預言の霊です。」19:11 また、私は開かれた天を見た。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをし、戦いをされる。19:12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。19:13 その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。19:14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。19:15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。19:16 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名が書かれていた。19:17 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、19:18 王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」19:19 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。19:20 すると、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々を惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕らえられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。19:21 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

## 導入

キリストを信じる信徒にとって、黙示録の中でうれしい個所に入ります。

今日は、小羊の婚宴について学びます。

また、イエス・キリストは力強い支配者であり、獣とその軍勢を打ち破られるというみことばに励まされます。

まず、この個所の背景を押さえておきましょう。

黙示録でこれまでに見られた裁きは、一般的に「患難時代」と呼ばれます。

この時代に、神を信じない世間に対して神が怒りを注がれます。

こうなる前に、教会、つまりその時代に地上に存在する信徒たち全員が、突如として天に引き挙げられます。

この奇跡は「携挙」と呼ばれます。

「携挙」という単語は日本語の聖書には登場しませんが、ギリシャ語およびラテン語に訳された聖書にはこれに相当する単語が登場します。

聖書はまずギリシャ語に訳され、次にラテン語、そして英語に訳されました。

この単語は日本語では「引き上げられる」と訳されています。

では、いくつか関連する聖書個所を読みましょう。

## ヨハネ 14 : 1-3

14:1 「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。14:2 わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

4:13 眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。4:14 私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。4:15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによりみがえり、4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。4:18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

この個所の背景は、すべての信徒たちが天に引き上げられ、キリストの花嫁となってから、小羊の婚宴が開かれるというものです。

先週、19 : 1-7 に記された群衆の賛美はバビロン陥落の祝いであったと言いましたが、同時に、小羊の婚宴の序章でもあります。

### 1. 小羊の婚宴 (7-10 節)

まず、7 節をご覧ください。

19:7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができたのだから。

小羊と花嫁の婚礼が始まろうとしています。

これは、何を指しているのでしょうか。

聖書は、イエスが「小羊」であると教えます。

イザヤ書 53:7 彼は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。

ヨハネ 1:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」

では、花嫁は誰でしょう。

聖書には、ふたつの花嫁が登場します。

旧約聖書は、神がイスラエルの夫となると語ります。

エレミヤ 3 : 14-15

3:14 背信の子らよ。帰れ。——【主】の御告げ——わたしが、あなたがたの夫になるからだ。わたしはあなたがたを、町からひとり、氏族からふたり選び取り、シオンに連れて行こう。3:15 また、あなたがたに、わたしの心になつた牧者たちを与える。彼らは知識と分別をもってあなたがたを育てよう。

今日は他の個所は開いて読みませんが、旧約聖書の他の個所にも、同じ考え方が示されています。(エゼキエル 16 章、ホセア 2 章)

旧約聖書の教えでは、父なる神がイスラエルの花婿としてとらえられています。

そして、イエス・キリストは教会の花婿であることがわかります。

神はイスラエルを見捨ててはおられません。彼らは帰ってきます。

しかし、今日の聖書個所では、小羊はイエス、花嫁は教会と捉えています。

これを確認するために、新約聖書からいくつかみことばを読んでみましょう。

コリント第二 11:2 というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

#### エペソ 5 : 22-23

5:22 妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。 5:23 なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

これらの個所を注意深く学ぶと、イエス・キリストが夫で教会が妻であることは明らかです。

(とくにエペソ 5 : 27 をよく考えるとわかります。)

皆さんはこれまでに、豪華な結婚式に行ったことがあるかもしれませんが、この個所に記された婚宴は、はるかにすばらしい天国への歓迎です。

イエス・キリストとの婚礼は、私たちが知る人間同士の結婚とは違います。けれども、婚姻のすべての要素が含まれます。

皆さんの中には、イエス・キリストとの未来を描く上で結婚という比喩が用いられるのは奇妙だと思う人もいるかもしれません。

しかし、その比喩が一定の真理を教えてください。

良好な結婚生活には、4つの不可欠要素があります。

この4つの要素は、私たちとイエスとの関係においても不可欠です。

- a) 愛がなくてはならない。 愛のない結婚とは、矛盾した言葉です。イエスを心から愛し、イエスとの関係をしっかり理解していなければ、みこころにかなった関係を築くことはできません。イエスと私たちとの関係の根底には愛がなくてはなりません。
- b) 親密な交わりがなくてはならない。 男性と女性がひとつになるというのは非常に親密になることです。クリスチャンとイエス・キリストとの関係は、どんな関係よりも深く親密でなくてはなりません。
- c) 喜びがある。愛し愛される喜びは、至高の喜びである。 人間同士の結婚関係には、たくさんの愛情をお互いに注ぎ合わなくてはなりません。片思いではだめです。私たちとイエスの関係は、喜びをもたらすものでなければなりません。もし喜びがないなら、何かおかしいと言えます。また、イエスに何もささげることなく、イエスにお願いばかりしているなら、その関係は一方通行です。イエスに何らかの形で仕えようと、喜びが得られますが、このような関係では、その喜びは得られません。
- d) 忠実と誠実がなくてはならない。 夫婦のどちらかが相手に不実だと、結婚生活は長続きしません。クリスチャンは、イエス・キリストに対して忠実でなくてはなりません。イエスはクリスチャンに対して常に誠実であります。

聖書は、私たちとイエスの関係を理解する助けとして結婚の比喩を用いていますが、その理由がこの説明でわかったでしょうか。

8節には、花嫁が光り輝く、きよい麻布の衣を着るとあります。

この麻布は、聖徒たちの正しい行いです。

この「聖徒」という単語は、新約聖書で信徒たちを指します。

エペソ 1:1 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。

コロサイ 1 : 1-2

1:1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、 1:2 コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。

人はクリスチャンになると、新しいアイデンティティを得ます。

それは、イエス・キリストにある身分や立場に基づきます。

自分がキリストにあってどういう者であるかを知るとはとても大切です。というのも、サタンはその認識を必死に消そうとするからです。

自分がキリストにあってどういう者であるかについて、個人的に学び、信仰の励みとして数カ月に一度それを振り返るのは良いことです。

キリストにあるアイデンティティに関する聖書箇所いくつかをここで挙げてみましょう。

- a) ピリピ 3 : 20—私たちの国籍は天にあります。私たちの本当の故郷は天国です。天国が私たちの属する場所です。
- b) コロサイ 3 : 12—私たちは、聖なる者となるよう神に選ばれた者です。神は私たちを深く愛しておられます。
- c) エペソ 5 : 8、マタイ 5 : 14—私たちは、世の光です。

前半の最後となる 10 節で、ヨハネは御使いを拜もうとしてひれ伏しました。

すると、そのことを咎められました。

御使いは、ヨハネたちと同じしもべだと言い、「神を拜みなさい」と言いました。

ここで、ヨハネが本能的に御使いを拜もうとしたのは、不思議に思えるかもしれません。

初代教会の時代は、御使いを拜む傾向がありました。

これは、ユダヤ教の間違った考え方の影響です。

旧約聖書が記されてから、新約聖書が記されるまでの間の期間に、有名なラビや学者によるたくさんのユダヤ教の書物が出ました。

これらの書物は、神の霊によって書かれたものではなく、人間の考えによるものでした。

その中で、御使いたちが礼拝の対象となったのです。御使いが私たちの祈りを神のもとへ届けてくれると教えられていたからです。（トビト記 13 : 12-15、ダニエル書補遺 6 : 2）

ローマカトリック教会は、これらの書を神のみことばとして認めています。その影響で、ローマカトリック教会は、イエスではなくマリヤ崇拜へと逸脱してしまいました。

真理から道を踏み外すのには、必ず理由があります。

サタンがそうさせるのですが、私たちは気をつけていなくてはなりません。

ここで重要なのは、神だけを礼拝することです。イエスは尊い血を流し、死ぬことによって、私たちのすべての罪の罰を受けてくださいました。すべての罪とは、過去の罪、現在の罪、そして未来の罪すべてです。

では、11-21 節に進みましょう。

この箇所を理解するには、ふたつの質問に答えるのが一番良いでしょう。

1. 白い馬に乗った方は誰か。
2. この方は何をするために来られたか。

白い馬に乗った方はイエスです。この箇所から、その理由を 7 つ挙げましょう。

1. 当時、白い馬は戦いの勝利を祝うために用いられました。

つまり、白い馬に乗った方は、勝利者として来られます。イエスは、まもなくやってこられ、地上でイエスに敵対するすべての人々に勝利を宣言されます。

2. 白は、騎手の汚れない聖なる性質を象徴しています。  
イエスだけが、完全に聖なる汚れない性質の持ち主だと宣言できるお方です。
3. 白い馬に乗っている方は、「忠実また真実」と呼ばれています。(11 節)  
サタンとは正反対で、イエスは唯一私たちが信頼できるお方です。  
イエスは忠実で真実なお方であることを多くの信徒たちが体験しています。イエスは、ヨハネ 14 : 3 の約束を実現するためにこの地上に戻ってこられます。

ヨハネ 14:3 わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

4. その目は燃える炎のようでした。

黙示録 1:14 その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。

イエスの目を逃れ得るものは一切ありません。

ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

これまで、イエスのまなざしは、神の子たちをご自身のもとに導く優しさと喜びを映していました。

また、病気や悩みに苦しむ人々を羊飼いのない羊のようにあわれむまなざしでした。ペテロがイエスを知らないと言った後で立ち直った時には、イエスの目に赦しが満ちていました。

オリブの丘に立ってエルサレムのために涙を流されたのも、このイエスの目です。しかし、この個所では、イエスの目は鋭く輝く裁きの目です。

5. 頭に多くの王冠がありました。  
原語のギリシャ語の単語「ダイアDEM」は、支配者の冠を意味します。  
王族や権力者のみがこの種の冠をかぶりしました。  
12 節には、馬に乗った方がひとつではなく多くの冠をかぶっていたとあります。  
つまり、支配者たちの冠を回収したということです。  
当時、他国を征服した場合に、その国の支配者の冠を持ち帰る習慣がありました。  
この個所では、白い馬に乗った方は、この地上の主権者であると宣言しておられます。

サムエル第二 12 : 29-30

12:29 そこでダビデは民のすべてを集めて、ラバに進んで行き、これと戦って、攻め取った。 12:30 彼は彼らの王の冠をその頭から取った。その重さは金一タラントで、宝石がはめ込まれていた。その冠はダビデの頭に置かれた。彼はまた、その町から非常に多くの分捕り物を持ってきた。

イエスは、地上の王たちを従える力と権威を持つ唯一のお方です。

6. その方の衣は血に染まっていた。

イザヤ書 63 : 1-4

63:1 「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」 「正義を語り、救うに力強い者、それがわたしだ。」 63:2 「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」 63:3 「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って

彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。 63:4 わたしの心のうちに復讐の日があり、わたしの贖いの年が来たからだ。

白い馬に乗った方の衣が戦いの始まる前から血に染まっているのは、奇妙に思えます。しかし、これはイエスにとって初めての戦いではありません。注解者の多くは、これが贖いの血ではなく、戦いの血であると考えます。世界の歴史の舞台裏で、イエスご自身の民のためにずっと戦っておられます。エペソ 6 章からわかるように、目に見える戦いの裏には、必ず霊の戦いがあります。

7. イエスが白い馬に乗った方である最後の証拠は、13 節にあります。

その方の名は、「神のことば」と呼ばれています。これにより、白い馬に乗った方の正体が明らかになります。それは主イエス・キリストです。

ヨハネ 1:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

ヨハネ第一 1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、

白い馬に乗った方は、何をしに来られたのでしょうか。

イエスが来られるのは、この世で最大の戦いに加わるためです。

戦いの前に、御使いが空を飛ぶすべての鳥を集め、これまでにないような獲物を与えます。

毎年、無数の渡り鳥がヨーロッパからアフリカに渡ります。その途上で、イスラエルの上空も通ります。

多数の渡り鳥の移動パターンを、イスラエル政府は研究しています。

残念ながら、今日の個所が実現する日を待ち望んでのことではありません。鳥が航空機にとって危険な存在だからです。

イスラエルは地理的に、渡り鳥の移動経路となっているのです。

ですから、無数の鳥が一時に一カ所に集まるのは容易いことだとわかります。

鳥が死体に集まり、すべての死体を埋葬するのに 7 カ月もかかることは、エレミヤ書とエゼキエル書に預言されています。

エレミヤ 7:33 この民のしかばねは、空の鳥、地の獣のえじきとなるが、これを追い払う者もない。

エゼキエル 39 : 11-13

39:11 その日、わたしは、イスラエルのうちに、ゴグのために墓場を設ける。それは海の東の旅人の谷である。そこは人が通れなくなる。そこにゴグと、そのすべての群集が埋められ、そこはハモン・ゴグの谷と呼ばれる。 39:12 イスラエルの家は、その国をきよめるために、七か月かけて彼らを埋める。 39:13 その国のすべての民が埋め、わたしの栄光が現される時、彼らは有名になる。——神である主の御告げ——

19-21 節は、白い馬に乗った方が獣と偽預言者と戦うと語ります。

彼らは生きたまま、硫黄の火の池に投げ込まれます。

最近、地獄についての教えはあまり聞かれませんが、

しかし、イエスを信じない人たちにとっては、それは現実のものです。

地獄は、人が殺される所ではなく、永遠に罰を受ける場所です。

イエスは私たちの心に平安をもたらしてくださいますが、地獄には平安はありません。  
イエスは愛を与えてくださいますが、地獄に愛はありません。  
イエスは光を与えてくださいますが、地獄に光はありません。  
イエスは喜びを与えてくださいますが、地獄に喜びはありません。

マタイ 13:42 火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのです。

他の人たちは、馬に乗った方、つまりイエスの口から出る剣によって殺されました。  
獣の刻印を拒んだ信徒たち以外は、この世のすべての人が殺されます。

これによって、イエスが君臨される千年への道が開かれました。  
20章に記されたこの出来事については、7月16日にお話します。

## 適用とまとめ

### 1. 今日一番大切なことは、聖書が地獄と呼ぶ場所から救われていると私たち自身が確信することです。

どうすればそうできるでしょうか。

まず、いくつかのことを認識しなければなりません。

- a) 神はこの世を造られました。そして、ご自身と関わらせるために、最初の人をお造りになりました。その後、最初の人のお助け手として、女を造られました。神は、ふたりを完ぺきに造られました。ふたりには一切罪がありませんでした。
- b) 最初の人々が神に逆らった結果、神はこの世に呪いをもたらした、人間は創造主なる神から引き離されました。
- c) 神は愛に満ちたお方なので、壊れた関係を修復する道を与えてくださいました。最初は、人間の罪の覆いを提供するために、動物が死にました。やがて神は、ご自身の御子イエス・キリストを遣わし、私たちが受けるべき罪の罰をこのお方に負わされました。
- d) 私たちがイエス・キリストに信仰を置き、このお方の御業を信じるなら、神の御怒りから救われ、死んでも地獄に行かずに済みます。  
今日の礼拝後でも、イエスを信じることはできます。

### 2. 次に大切なことは、クリスチャンの信徒のみにあてはまります。それは、私たちがイエスときよい結婚のような親しい関係にあると自覚することです。

イエスとの愛情に満ちた関係や喜び、親しい交わり、完全に誠実で忠実な関係がないなら、何かがおかしいのです。

これはただちに修復する必要があります。そうすれば、今後、喜びを実感することができるでしょう。

礼拝後、リフトの祈りのコーナーに行き、誰かに一緒に祈ってもらいましょう。これはとても大切なことです。